

過疎化に「100万人の引きこもり」が役立つワケ

文春オンライン 2020年11月14日

<https://bunshun.jp/articles/-/41353>

(文意を損なわない省略や修正を加えた)

いまや日本の過疎地域は国土の6割弱、市町村数の半数近くを占め、人口の偏在が進むなか、「所有者不明」の土地は国土の約20%を占め、手つかずのまま放置されている。新著『コモンの再生』を上梓した思想家の内田樹（うちだ・たつる）が、日本の過疎化問題の本質に切り込み、打開策を提言する。

1. 過疎化の現状

——地方の「所有者不明」土地問題は全国的に深刻で、いまや九州本土を上回る約410万haもの面積が、手つかずの土地・空き家として放置されています。

内田 [中略] 先日ある講演に呼ばれて行った時に、地方の人口減の話をしました。講演後、となりに座っていた方が「自分の故郷は、自分が子どものころは200戸の集落だったが、自分たちの子の代で引き続きこの集落で暮らすという家は2戸しかない」という話をしてくれました。1世代で人口が100分の1にまで減少するわけです。住人が2戸しかない集落だと、公共交通機関はどうなるのか、行政サービスや医療や消防はどうなるのか。バスは通るのか、ライフラインの維持はしてくれるのか。たぶん、そんな少人数のところはコストはかけられないということでいずれ切り捨てられることになると思います。そこが住めなくなると、いずれ森が集落を呑み込んでしまう。

2. 自然から文明をどう守るか

内田 これまで、環境問題というと、「自然をどう守るか」という議論でしたけれど、これからはそれに加えて「過疎地の文明をどう守るか」という議論も並行して行わなければならなくなってきました。久しく人

間の繁殖力が自然の繁殖力を圧倒してきたわけですが、そのフェーズが終わった。これからは自然の侵略からどうやって人間の文明を守るか、都市文明のフロンティアラインを守っていくかを考えなければならない。そういう発想はこれまでなかったですから。

——たしかにそうですね。

内田 自然の力は本当にすごいです。廃屋って、外から見るとそれとわかるほど荒れ果てますよね。人が住まなくなると、すぐに壁がはげ落ち、瓦が落ち、柱まで歪んでしまう。前に東京で見かけた廃屋は、半年後に通りがかったら竹が屋根を突き破っていました。その家に人が住んでいる頃にも、庭には竹林があったんでしょうけれど、竹が家の下にまで根を伸ばして、床を突き破るといようなことはなかった。人間がそこに住んでいるというだけで、自然の繁殖力は抑制されるからだと思います。

昔はどんな神社仏閣でも「寺男」とか「堂守」といわれる人たちがいました。門の開け閉めをしたり、鐘を撞いたり、掃除をしたり、たいした仕事をするわけでもないのですが、広大な神域や境内に人が1人いるだけで大きな建物が維持されて、森に呑み込まれるということは起きなかった。これは文明を守るための、先人たちの知恵だったのだと思います。

[中略]

人間はフロンティアを開拓して、自然を後退させてきたわけですが、これからの人口減少時代では、自然の侵略を防いで都市文明を守ることがフロンティアの仕事になる。

[中略]

内田 経済学者の宇沢弘文先生によると、全人口の20~25%くらいは農村に住まなくてはならないそうです。[中略] これは割と直感的な数字だと思います。でも、この直感を僕は信じます。全人口の5分の1くらいは都市ではなく、里山 [=このインタビューでは農村と同じ意味。都市と自然の境界にあるエリア] に住んだ方がいい。そこで年金生活をしてもいい

し、作家活動をしてもいいし、音楽をやってもいいし、陶芸をしてもいい。とにかく里山に「人がいる」ということが大事なんです。

[中略]

3. 逆ホームステッド法

内田 いま里山が過疎化・無人化してゆくときに、ここをもう一度「フロンティア」として再興する。その前にひとつ大きな問題があります。それは所有者・地権者がわからないという土地建物がいま過疎地にはたくさんあることです。私有財産ですから、自治体といえども勝手に手は付けられない。でも、無住の家屋は防災上も、防犯上も、公衆衛生上も非常に大きなリスクです。だから、何とか再利用したいのだけれど、できない。

僕はそういう土地や建物はもう私有財産ではなく、公共財に戻してしまえばいいと思います。もともと土地というのは私有すべきものではないと僕は思っています。一時的に公共のものを借りて使用しているだけで、使用しなくなったら、再び公共に戻すということด้วย。これらの無住の家屋や耕作放棄地をもう一度公共のものとして、地域の人々で共同管理する。

——斬新な発想ですね。本書で先生が提言している、一定期間誰からの所有権も申請のない土地家屋をコモン [=公共物] に戻す「逆ホームステッド」法を提言していますね。

内田 ホームステッド法というのはアメリカ全土では1863年、南北戦争中にリンカーン大統領によって発令された法律です。国有地に定住して、5年間耕作に従事したアメリカ市民には無償で160エーカーを与えるという法律です。

僕が提案する「逆ホームステッド」法は、放置された私有地や無住の家屋を自治体が接收して、コモンにして、そこに住んで5年間生業を営んだ人に無償に近いかたちで払い下げるというアイデアです。里山に再び人を呼び戻すためには、よい方法だと思います。

4. 引きこもりの移住

内田 もうひとつアイデアがあるんですけど、それは「引きこもり」の人たちに「歩哨」 [=ガードマン味] をしてもらおうというものです。

一説によると、日本にはいま100万人の「引きこもり」がいるそうです。その人たちに過疎の里山に来てもらって、その無住の家に「引きこもって」もらう。里山だと「そこにいるだけで」、里山を自然の繁殖力に呑み込まれることから守ることができる。部屋にこもって1日中ゲームやっけていても、ネットをしていても、それだけで役に立つ。

それほどの給料は払えないでしょうけれども、人がいなくなった集落でも、お盆のときだけは戻ってくるから、家は廃屋にしたくないという人はたくさんいます。そういう何軒かの家からちょっとずつ出してもらえば、仕事になる。家賃は要らないし、物価だって安いし、気が向いたら、畑を耕して野菜だって作れる。

そういうマイクロな求人とマイクロな求職をマッチングする仕組みができれば、かなりの数の「引きこもり」が里山の「歩哨」として暮らして、かつて西部開拓者が経験したような達成感や全能感を体験して、メンタル的に回復するというようなことが起きるんじゃないか。そんなことをぼんやり夢想しています。

——やりたがる人、意外に多いと思います（笑）。

●思い切った施策を

内田 フロンティアを守るのに実はそんなに人数は要らないんです。大伽藍を守るのに「寺男」が1人いて、寝起きしているだけで十分だったように。

農村人口を増やし、里山のフロンティアラインを守るには、「逆ホームステッド」法や「引きこもりの移住」くらいの思い切った施策が必要だと僕は思います。土地は果たして私有すべきものなのか。私有してよいものなのかという問いを含めて、日本列島をどう守るかという課題を文明史スケールから捉え直すことが必要だと思います。